

▲思想の界の教書▲

◎法華經講義
 本多日生師著
 洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵
 税十六錢を以て提供す

◎如來壽量品講演輯
 本多日生師講義

◎精神の修養——思想の調整
 軍事教育會發行
 内容豊富立論堂
 々近代の快文字
 なり

◎軍神加藤清正公
 陸軍少將 小原正恒著

◎立正安國論略解
 マスター、エグ、アツツ柴田一能著

◎縮法華經並開結
 橋香集

◎勤行作法

壽量品の大意を知らざれば一代佛
 教の中心を知らざるもの也佛敎の
 活力眞價は壽量品にあり、讀め大
 に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

定價金廿五錢
 郵税金四錢

清正公の人格及宗教的信仰を知ら
 んとするものは先づ本書を讀まざ
 る可らず施本用に尤も適せり

上下二卷
 郵税金四十八錢

第一版已に賣切れ再版出来△日蓮主
 義と國家との甚深なる交渉を知らん
 するものは須らく本書を讀むべし本
 書は通俗的に能く之を理解せしむ抽
 珍美本にして百十頁の内容あり

一部金十錢
 郵税金二錢

菊判半截携帶に尤も便
 紙製天金四十五錢
 郵税金六錢

日蓮上人の遺文拔萃にして研究順
 序の指南あり

一部拾錢
 郵税金二錢

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして
 謬りなきを要す本書は日蓮門下を
 通じて齊しく奉行すべき作法を示
 したる教典也

一部金五錢
 郵税金二錢

日蓮主義の將來

本多日生

現在の印度

木村龍寛

正義の實と迫害

三上義徹

朝鮮宗教視察談

朝倉俊達

統一

號三十四百二第

號月五

日本の柱

清水梁山

229

天晴會講演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢
本文約八百頁
總クローズ上製美本
日蓮上人御尊像及
講演會寫真入り
送内 地拾貳錢
料朝鮮滿洲臺灣四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし

▲讀むべし 本書を讀むべし 本書は人格完成の好資料也

内容

■ 師崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作文學博士。
■ 臨田大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。
■ 石橋中將。笹川文學士。寬博。箕作博士。山根僧正。

發賣所

東京市神田區
美土代町二、一
東京市小石川區
白山前町十七

三三

上

秀義徹
發賣所
東京二五七四七番
振替口座東京二八八四〇番

正義の實迫害

(1)

近來思想問題の研究に伴ひ、久しく閑却されて居つた日蓮主義の勃興を觀る様になつたが、未だ日蓮主義の要領を徹底的に理解せるものは少ない、聖日蓮の主張論道は、單に個人に對する信仰鼓吹の運動であるかの如く考へて居るものが多い様であるけれども、聖日蓮が一代六十一年の生涯は、宗教的及國家的大理想の實現に向つての躍動に外ならぬ、聖日蓮は透明なる識見を以て宗教上に於ける正邪を選択し裁定を與ふると共に、國家の健全なる文明を建設せんが爲に最大の努力を成されたのである、およそ一國の文明は武の力と經濟の力のみでない、天地を貫串せる正義公道の力に依つてこそ、始めて健全にして豊富なる文明が建設せらるゝ事を看破し、其基礎たる思想の選擇に就て嚴密なる裁定を要する所以を絶叫せられたので、如何に兵と富とは充實して居つても、國運發展の動力たる思想の權威が確實でないならば、形のみ文明は永久に存立するものでない、花のみにして實のない貧弱なる文明は、何つの日にか亡びざるを得ない、若し夫れ、正義公道の力を以て富と兵とを運用し其發展に努めんか、必

ず最後の文明を達成することが出来る、是即ち文明建設の最大要件である、而してこの原則は昔も今も將來も渝らざる一貫せる眞理である、政治家も宗教家も教育家も、この原則に對する理解を缺くならば、いかに器械的設備は成り統計的成績は見るべきものがあらうとも、それは眞實なる文明でない、顧みれば鎌倉當年における北條の政策は、武力萬能主義を以てその權勢を恣にし、暴慢にも自己一門の勢威を張るに力を用ひ、我建國の本義を無視して大義名分を謬り、思想問題の如きは全然之を顧みず、爲に天下の民は心に煩悶を懷き生活は悲慘に陥り、安堵の思ひなく苦惱に泣かざるものはない、斯様な國民の生活状態は、其國の健全なる平和文明であると云ふ事は出來ない、國家が斯様な形に於て存在して居るとすれば、それは精神的事實的に亡びたながら一人の起つものがない、茲に於てか、聖日蓮が憂國の熱情と護法の衷誠とは止めんとして止むることは出來ない、一國の秩序と其尊嚴を保維せんが爲め、また天地の大道を人心に布いて謬れる思想に拆伏の鐵槌を加へ、國民最後の歸向を明かにして法と國との權威の絶對なる所以を熱叫せられたのである、上人の思想發表の文書は、悉く國の文明と人の發展とに努力せられたる證明である、かくて上人の覺醒運動は一

歩も假借する所なく、熱烈天を衝く底のものであつたけれども、爲政者は反て之を狂なり愚なりと嘲つて其權威を認めざるのみか、この國家的大運動に妨害を加ふるの策を廻らすに急なるがため、權勢武門に叩頭百拜を能事とする宗教家と相携へて、陋劣なる手段を以てこの聖業を傷くるに心を痛めたのである、斯かる亡國的宗教家の態度を憤れる聖日蓮は、何條之を恕して置くことが出來やうぞ、上人の道念は天地神明に通ひ、その意氣や政治家宗教家を吞めり、故にその運動はいよゝ峻烈を極む、正義の力は大きなり、來りて給仕の禮を取る弟子もあれば、多年の信仰を更めて歸依する信徒もあつて、感化の實蹟を観る様になつた、されば宗教徒の怨恨愈々募りて迫害の密議を凝らすこと十數回、北條一門及官僚系またこの事に賛同し、遂に彼等は正義の爲に立てる聖日蓮を亡きものにせんと決したのである、即ち文應元年八月二十七日の夜半、松葉ヶ谷の草庵は法敵の爲に火を放たれ、上人の安息所は灰と化したてはないか之を上人の自叙に窺はゞ

『念佛者並に檀那等またさるべき人々も同意したるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に數千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかにがしたりけん、其夜の害もまぬかれぬ』

斯かる焼打の難も、金剛の如き信念に何等の影響を與ふるものでない、益々鎌倉琵琶の小路に大廣長舌を振ひ、政道の大義と佛教の名分を論明して人心の肺腑を衝いた、されども時の政治家や宗教家は、卑劣なる壓迫を加ふるのみで、誰一人堂々と議論を上下するものはない、唯だ心に恐れを懐いて上人の身を置くに所なきに至らしめんと企て、遂に國事犯の罪名を科して伊豆の伊東に流し給へるは、頃は龜山天皇の御代弘長元年五月十二日、上人の聖壽四十歳の御時である、斯の如く當局者が法制を無視したる亂暴狼藉さ加減、いかで政道の行はれ得べき筈があらう、人心の亂る、蓋し必然の理なるのみ、聖日蓮の自叙に

「故最明寺入道殿に申し上げぬ、されども用ひ給ふ事なかりしかば、念佛者等此由を聞て上下の諸人を語らい打ち殺さんとせし程にかなはざりしかば、長時武藏守殿は極樂寺殿の御子なりし故に、親の御心を知りて理不盡に伊東の國へ流し給ひぬ」とある、堂々たる上人の正論公義、之に抗する腦力の無い法師輩が、鎌倉の威力を藉りて暴行を取てしたが、上人の心は自由に天地に濶歩し身は柔順に法制に従ふ「日蓮立て申す法門を一偈一句も答ふる人一人もなし、上下一同に惡み嫉みて讒奏申すに依りて、生年四十弘長元年五月十二日には伊豆の國伊東の莊へ配流し、伊東八

郎左衛門尉の預りにて三箇年なり」

と、いかに當年宗教家の人格心事の劣等なりしかを感察せざるを得ない、彼等は宗教的存在の理由も、自己の職分をも知らざる低能者であつたに相違ない、上人が内憂外患競ひ起りて國運の危きを察し、人心結合の基礎たる思想統一の急を叫んては

「所詮は萬祈を抛つて諸宗を御前に召し合せ、佛法の邪正を決し給へ」
「早く一處に集りて對決を遂げしめ給へ、日蓮庶幾せしむる處なり、敢て諸宗を蔑如するに非るのみ、法華の大王戒に對して小乘蟲蠃戒豈に相對に及ばんや」

と、十一通の對決狀を北條時宗以下の政治家及宗教家に呈したが、名利に眩みし眼には忠誠の大文字は見えぬであらう、さりとして國と人と道とに捧げたる上人の全身心には、更に一段強烈に諷諤の獅子吼を大にしてその猛省を促がしたのである

「而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行す、然る間聖人國を捨て善神瞋を成し、七難並に起つて四海閑ならず、方今世悉く關東に歸し人皆土風を貴ぶ」

(5) 上人の論策、正しく政治上宗教上の問題を根本的に解決せんとする雄大なる識見にして、思想の幼稚なる一輩には眞意義を窺ふことが出來ないのであらう、それも無理はないが、この論策に對して謀叛人扱ひをするに至つては沙汰の限りである、斯くて壓

伏迫害は雨の如く下る、房州小松原の劔難、相州龍口の刑、北海佐渡の流難、其他の小難數を知らざる程、上人の一代は法難の血涙史である、凛として今なほ聲あるを覺ゆ、正義と法難、是實に天分を自覺せる宗教家の覺悟を要する所、あゝ上人の大なる法難は、國民思想の歸趣を明かにし、一國の健全なる文明を進めんが爲の大忠誠の發動である、文明建設の爲に貢献したる聖日蓮の偉功、思想研究の旺なる現代に於て未だ上人の卓識に接するもの甚だ尠なきが如きは、あまりに思想文明の低級なるに驚かざるを得ない、我國の政治及思想上の文明史には、聖日蓮の思想運動を特筆するを要する、囚はるゝ勿れ、日本人としての聖日蓮の雄遠なる思想を窺ひ、現代文明の基礎的權威を把住するに努むることを熱望する、而して公平の態度を以て謹んで上人の自叙を拜せよ

「敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懐くが故に、身の爲に之を申さず、神の爲め君の爲め、國の爲め、一切衆生の爲に言上せしむる所なり」
 「國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正は經文の明鏡に依る」
 「早く我慢を倒して日蓮に歸すべし、今生空しく過ぎなば後悔何んぞ追ん」
 「縦ひ日蓮は悪しと雖勤ふる所の相當るに於ては何ぞ用ひざらんや、若し日蓮が申すことを御用ひなくんば、今世には國を亡ぼし後世は必ず無間大城に墮すべし」
 「敢て諸宗を蔑如するにあらず、但だ此國の安泰を存する計りなり」

日蓮主義の將來

本 多 日 生

凡そ佛敎を達觀するには教判を要する、而して教判の上から現はれた佛敎の本義の中で、何が一番大切であるかと云ふに本尊であります、是が大切であると云ふことは何人も異議がないのであります、それが大體に於て形式に囚はれて居りはせぬかと思ふ、本尊は單に字で書かれたものであると思ひ詰めて居るやうであるならば、日蓮主義は將來世界に飛躍することは出来な

はない、生ける天照大神の神格が尊いのである、然るに世人は寫象式ばかり重んじて本質を忘れ、妙見様は柳島で厄除の御祖師様は堀之内と云ふやうに定めて考へて居るのは大なる間違であつて、是は極く低級な宗教思想である、低劣なる小人鳥的僞佛的思想であります、世界に流布すべき宗教はさう云ふものではない今日は東西の文明が接觸して、西洋の文明宗教道徳の爲に日本の思想界は今や征服されやうと云ふ場合である、佛敎徒の之に對する戦備は果してどうであらうか此の思想界の戦争に於て、陣頭に立つて勇しく奮戦して居る者は甚だ少いのである、僅に防禦戦をやつて厚い塙の中に閉ぢ籠つて小さい穴から豆鐵砲を打つて居

てある、本統の御釋迦様は字でもなければ木像でもない、天照大神が尊いと云ふのも神棚や神符が尊いので

るに過ぎない、展開して敵前に進み身を曝して大決戦を試みやうとする者はない、實に日本の佛教と云ふものは淺ましい有様である、退却又退却で敵から壓迫されて居る、彼等は寺院の中へ隠れて居るから外の事は分らないかも知れないけれども、今日の日本の教育界其他思想界は佛教徒の意氣地ないのに呆れて居るのである、さうして佛教を攻撃したいが何分多數を占めて居るから遠慮して居るのである、さう云ふ事になつて來たのは詰り宗教の狀態に低劣な點があるからである併し佛教の本義を達観するならば、佛教と云ふものは元々が決して偶像教でも何でもないのである、尤も木像偶像が許されて居らぬではないけれども、木像や靈跡を参拜することが佛教其のものの總てではない、佛教はもつと高い深遠な所に根據がある、阿含經の初めから印度の婆羅門教が種々入つて居るが、それ等を超した道德的精神的信仰を鼓吹して居るものが法華經である、一あらゆる思想界を通じて法華經程高い深い教はない、昔の言葉で言ふならば、全身の舍利と云ふも

のを法華經の中に戴くのであります、全身の舍利とは人格の實在者であります、即ち大人格者が實在して御座ると云ふ意味であります、それを活用するが爲に示現して木像にもするのであります、法華經の壽量品に「我常に此に住して法を説く」とある、觀音賢經には「佛は常に滅し給はずと知るべし」と説かれてある、尙も日蓮主義を奉ずる者は何とも言はれない絶大なもの、即ち久遠實成の本佛が此の宇宙法界に實在し給ふと云ふ信念に生きて居らねばならぬ、之を表はす場合には曼陀羅式であるとか木像式であるとか種々あるが、曼陀羅とか木像とか云ふことを議論して居る間は、日蓮主義は本統に復活したものでないと思ふ、日蓮上人は曼陀羅に表はした本尊は極めて大切に言ふて居るが、開目抄あたりの説ける所に依れば、必ずしも形式に表すことを以て第一として居ないのである、日蓮上人自ら法を説いて、而して人の乞を容れて曼陀羅を書與へては居らるゝけれども、決して曼陀羅を擔いて行かれた譯でもなければ、又辻説法をされた時に

も曼陀羅を掛けた譯ではない、此の點を能く考へなければならぬ、本尊の本質と寫象式との關係は充分區別して置かねばならぬ、それから妙法蓮華經の五文字は此の儘世界のどこへ持つて行つても立派に唱へらるべきものである、此の御題目の唱誦は日蓮主義としてどうしても已むに已まれぬものである、是は實在者ではない、佛でもない、神様の名前でもない、字である、是は字で宜いのである、是は佛と我々との間を繋ぐ爲に字から通して結び付けるものである、人の心の中の信仰を表白する爲に口に南無妙法蓮華經を唱へる譯でありませぬ、それから又昔から随分多くの人に信ぜられて來たことであるが、未だ世界が出来ない前に虚空の中に旗が下がつて居つて、旗に金の文字で南無妙法蓮華經と書いてあつた、其の字が光つた爲に法華經が出来たと云ふやうな思想が今日でも尙残つて居るやうである、今日宇宙の創造に先つて御題目の旗がぶら下がつて居つたなどと眞面目に言へば、東西の學者は皆吹き出します、さう云ふやうな愚説を今後の僧侶の頭の

中に教へ込んで行かぬやうにしたいものである、寫象式の議論も大切であるけれども、之を超越して本質に入つて我が真心と實在の佛とを忘れないやうにしなければならぬ、私は此の點に就ては大に考へて居るのであります、是は決して紙の上の議論ではない、法華經の壽量品を四はれざる精神を以て讀んで見れば分る決して御題目の旗がぶら下がつたなどと云ふことは書いてない、そんな形式上の問題は一つもない、然らば何が書いてあるか、如來が三世十方法界を貫いて此の宇宙間に絶へず人類救済の仕事を爲して居らるゝことが詳しく説かれて居る、殊に毒を飲んだ子供が厭がつて薬を服さない爲め、父の良醫が方便を以て薬を服用させた所は非常に大切な所でありませぬ、壽量品は佛教の精髓であります、此の佛教の本義本質に對しては科學も哲學も反對することが出来ない、茲に於てか法華經は世界の宗教の中に立つて雄飛することが出来るのであります、佛教の本義と云ふことはやがて本尊に對する我々の信仰の意義と云ふことになるのであります

世には平信心とか無解有信とか云ふて、無暗に南妙法蓮華經さへ唱へればそれで宜いやうに考へて居る人が多いが、それは大なる誤りである、盲目滅法盲目的信仰を鼓吹することは良くない、何にも分らないで唯口先ばかりで御題目を唱へたとて何の役にも立たぬ、此の平信心は今日尙大勢力を持つて居るのであるが、低劣な宗教としては或はそれで宜いかも知れませぬが、現今の世界の思想界に教ふるには、教義や信條は何ても構はぬ、唯南無妙法蓮華經と唱へさへすればそれで宜しいと云ふ議論で廣宣流布する事が出来ると思ふのは大間違であると思ふ、下等な者の中にはそれでも歡迎せらるゝてありませうが、世界を光被すべき最良最高の宗教を以て任ずる日蓮主義としてはそれは満足が出来ぬ、どこ迄も信仰の意識と云ふものを明かにしなければならぬ、法華經とは何ぞや、信仰の意識が不透明なものに向つて明かな信仰意識を興ふるのが法華經の開顯ではないか、信仰意識を最も強く信じたものが本尊の開顯である、審量品の開顯と云ふものは宗教

の信仰意識を完全なる意味に教へると云ふことに於て發揮されるのである、而して天台の方の法華經の解釋は非常に難かしいことを説き、淨土門に於ても法華經は大變難かしいものであるかのやうに考へて居るが、日蓮上人の理想して居らるゝ信仰意識と云ふものは、法華經の本義を明かにしたものに外ならぬのであるから、御妙判の全體に現はれて居る精神を考へて眞實の日蓮主義の信仰意識と云ふものを開明しなければならぬ、徒に御妙判の訓詁の末に拘泥し、文字章句に没頭して任舞つて、日蓮主義の世界人類を統一し且救濟せんとする大理想を誤解又は曲解することは極めて愚なことである、併し乍ら日蓮主義の信仰意識を明かにするには、別に難かしい學問も要らない、智慧がなくて立派な信仰を持つことが出来る、眞實の信仰と云ふものは人類に光明を興へ活力を興へ、人間を向上せしむるものである、眞の信仰の中からは斯う云ふ光明とか活力とか向上とか人類活動の源泉が流れ出づるものである、又一信は徳の母なり」と云ふ如く、本統の道

徳も信仰より出發するものである、此の如き高い強い信仰でなければならぬ、盲目的の信仰では駄目である、二十年も三十年も日蓮主義を信仰して居ても、法華經の本義本懐を悟らず唯居眠り半分に南無妙法蓮華經を唱へて居るものがあるが、さう云ふ盲目滅法の信仰に満足して居つては將來の向上發展を望むことが出来ない、法華經信仰の光を輝かし、世を益し國を益し、世界を光明に浴せしめ、日蓮上人の主義を一閻浮提に廣宣流布し、末法萬年の外、未來迄輝かすことを理想として奮闘しなければならぬ、或は哲學或は道徳を標榜して日蓮主義に反對する者ならば、佐渡御書に「儒教道教を以て釋教を制止せしかば道安法師慧遠法師法道三藏等の如く王を論じて命を軽くすべし」とあるが如く、彼等の間違つて居る所以を明かにして大に戦はなければならぬ、今や世界の思想は洪水の如く日本に入り來り、佛教迄が西洋の文明の爲に漸次蹂躪され破壊せられやうとして居る、此の時に方つて日蓮主義者は、厥起一番佛教全體を代表し日本の文化を

代表し、東洋の思想を代表して西洋の皮相文明と奮戦力闘しなければならぬ、斯う云ふ風に世界のあらゆる思想と戦ふ上に於ては、佛教の形式に囚はれず、法華經の本義本懐を達觀し、本尊の信仰を餘程悠暢した意味に解釋して行く必要があると思ひます。以上は平素自分が考へて居ることの大體を申述べたものであるが將來日蓮主義が復活するならば斯う云ふやうにありたい、今迄の七教團八教團分裂の誤りばかりでなく、日蓮宗全體が共通して今日迄逸し去つて居つた大切な點がある、日蓮主義發揚の上には此の隠れたる意義を闡明して大にやらなければならぬと云ふことの大確信を以て、各教團の僧侶は共に努力しなければならぬ、何もしないで唯慢心ばかり強くなつたならば、遂に日蓮主義は頑迷なる劣等なる宗教となるべきものであります、私は更に益々此の悠暢した日蓮主義を發揚することに努力して行きたいことを希望して已まないであります。

現在の印度

木村 龍 寛

私は八年許り日本を留守にして印度に滯留して居り
 ましたが、私の眼に映じました印度の國は、二通りに
 觀察し得るのであります、而して今日の日本の人々は
 印度に就いて新しい智識を有すること、思ひますが、
 私をして言はしむれば、日本の人々は皮相的の印度
 を知れるも未だ眞の印度を了解して居ないのでありま
 す、成程兩三年前より日印貿易も漸次隆盛に向ひ來り
 實業方面より印度の觀察に赴く人も多少あるし、農商
 務省も留學生を派遣せられ、陸海軍の武官も常に駐在
 して軍事上の調査に従つて居ると云ふやうなことはあ
 りますが、併し乍ら是は單に一局部に偏したものであ
 つて、印度の新しい半面だけを見たものに過ぎない、
 其の音釋加牟尼如來が説法せられて以來、今日迄傳へ

殘されて居る眞正の印度は日本に於て知る人がない、
 私は八年に亘る印度の滯在中、印度には新しい印度
 と古い印度との二つが存在することを認めたのであり
 ます、カルカッタ、ベナレス、ボンベイ、マドラス等
 の各地は、何れも新しい印度であつて、一番初めにさ
 う云ふ新しい印度に生活するとどうしても古い印度へ
 行くたくなくなる、山の麓の古い印度へ行き難くなる
 のである、所て私は金がない爲に最初に古い印度のチ
 タゴンと云ふ田舎の地に渡り、種々の方面の人々に接
 觸していろ／＼印度の人情風俗を味ふことが出來まし
 た、三年ばかりチタゴンに過してそれからカルカッタ
 へ赴きました、詰り古い印度から新しい印度へ移つた
 譯で、爲に印度の内部の事情も仔細に知ることが出來

印度では新しい印度と古い印度、西洋化した印度と西
 洋化さない印度、新進の印度と舊守の印度と二つに分
 れて居ることを知つたのであります、そこで先づ新
 しき印度とは如何なるものであるかと云ふことをお話
 しなければならぬ、新しい印度は全く暑い國である、
 さうして印度と云ふ國は妙な國であつて、世界のあら
 ゆるものを集めて居ると言つて宜い、カルカッタでは
 五百五十通りの言葉が使用されて居る、詰り五百五十
 通りの國語に通じて居なければカルカッタの全部の人
 に接することが出來ない、従つてそこには五百五十通
 りの人種が集合して居る譯である、其の五百五十通り
 の人種は皆夫れ／＼風俗習慣を異にして居るのである
 から、世界のあらゆる人種を網羅して居る、世界の縮
 圖と稱しても差支ない、又印度には非常に暑い所と寒
 い所とがある、唯一口に印度と言へば暑い國とのみ想
 像されるが、シンラカシミリ邊りは随分寒い所である、
 我々が渡印して梵語を研究する中心の土地や實業の盛
 んな都會は皆暑い所である、カルカッタ、ボンベイ、

マドラス等皆暑い、概して新しい印度は暑いと云ふこ
 とが出来る、それから印度は暑いばかりでなく、あら
 ゆる傳染性の猛烈な病氣が流行する所である、虎列刺
 赤痢、痘痘、マラリヤ熱、黒死病等恐しい傳染病があ
 る、私も此の半分分に罹つて仕舞つた、即ち虎列刺、
 赤痢、マラリヤ熱等何れも経験して居る、それから毒
 蛇に咬まれて弱つたこともあつた、幸ひ靴の上から咬
 まれただけであつたから一命には別條なきを得た、斯
 様に悪疫の多いのは單に氣候の爲めばかりでなく他に
 何か理由がありはせぬかと考へましたが、印度は頗る
 暑い國であると共に又大變汚い國であることが其の原
 因ではないかと思ふ、印度人には清潔とか不潔と云ふ
 觀念がないかと怪しまれる程である、印度人も或方面
 には非常に清潔であるかのやうだが、或方面に於ては
 極めて不潔だ、印度人は手攫みて食事するのであるが
 右の手で御飯を食ひ乍ら左の手で手鼻汁を上手にかむ
 其の手鼻を布のハンケチか紙で拭へば結構であるが、
 机でも柱でも、茶碗でも何でも構はず傍にあるものへ

こすり付けるから皆ビカ／＼光つて居る、磨いて光澤を發して居るならば宜いが、鼻汁で鼻汁光りに光つて居るのはどうも感心しない、非常に汚い、それから印度人は水の使い分けを知らない、カルカッタやマドラスのやうな都會には水道の設備があるけれども、其他の田舎にはそれが無い、そして印度は都會の数が甚く村落の多い國であつて、カルカッタ、マドラス、ボンベイ等の都布を除けば他は悉く村ばかりである、一二の都市の外には水道はないが、然らば印度人はどうして水を飲むかと云ふに、川のある所では川の水を飲む川のない所では水溜りがあつて其の水を飲む、故に印度の田舎には大きな水溜りが彼方にも此方にも澤山ある此の水溜りは古い昔からあつたものではなく、人が死ぬると菩提を弔ふ爲めに水溜りを作り、清き水で供養すると云ふのが元であつたのである、今日は其の水溜りて衣類を洗濯したり飲用水にしたりするが、日本の田舎の水溜りのやうに新陳代謝しない、一體印度には山嶽が少なく平原が多いからどこからも水が流れて來ない

従つて十年も二十年も前から、古い水が滯つて居る、尤も毎年雨期になると新しい水が入るけれども、新しい水が來ると同時に古い水も溜つて居るからして十年前の水もあれば五年前の水もある、三年前の水も残つて居れば去年の水も滯つて居ると云ふ風である、それで日本のやうな具合に雨と云ふものは年中降るものではなく雨期だけに限られて居て、八月より十月に至る四ヶ月間降雨があるだけである、其の雨期に溜つた水を一年も使用するのである、其の水で排水もする、併し日本のやうな風呂場がなく一緒に入浴するやうな事はない、彼等印度人は日本人の入浴振を聞いて裸體で大きな風呂場へ一緒に入るのは實に不届極まると云うて呆れて居る、印度人は入浴しても腰から下は決して人に見せない事にして居る、私なども八年の長い間印度に居たが一度も腰から下を見たことがなかつた、それは印度人は排水を使ふにも腰から下は着物を着けた儘で水中に入るのである、そして滑稽極まる事には着物を着た上から石鹼を用ふる事である、だから幾ら洗つ

ても垢の落る筈がない、さう云ふ水溜りて排水を使ふ食事して後手を洗ひ足も洗ふ、又子供の汚れたものも洗ふ、さうして其の水を飲むと云ふ有様である、斯う云ふ事をする者は無教育者ばかりかと云ふに、理學者も化學者も博士もやる、學者でも用ふる水は水だと言つて平氣なものである、さう云ふ汚い水を飲用する所からして赤痢、虎列刺、黒死病、痘痘、マラリヤ熱等が多く發生するのであらうと思はれる、識者の間には此事も次第に是認されて來て水道を早く完備せよと云ふ布令も出て居る、併し何等かの都合に依つて容易に實行されさうもない、我々の見る所では今日の新しい印度の或る方面に於ては非常に不潔であるが、或る方面に於ては非常に清潔を好み、厠に上ると其都度必ず着物の上から一杯水を被つて身を淨むる事になつて居る、是等は誠に綺麗なやり方だと思ひます、それから印度人は非常に裁判事を好み、印度人位裁判事を好む國民は世界にあるまい、一體野蠻な國民は常に裁判事を好むと云ふことであるが、印度人は野蠻人か亡國の

民か知りませぬが、兎に角印度人は非常に裁判事を好む、何でも裁判事であれば物が收まらなると云ふ有様である、收まるべきことも裁判所へ持出さなければどうしても收まらな、どの町へ行つてもどの村へ行つても一番大きい建築物は何かと云ふに、學校でも寺院でも公會堂でもない、裁判所である、又一番澤山人が集まる所は禮拜の爲め教會でもない、聽講の爲め公會堂でもない、訴訟の爲め裁判所は最も多くの人を見るのである、例へば僅々一尺四方の土地を取り返す爲に二千圓も三千圓も金を費消して訴訟を提起する、而して自分は五十遍裁判したとか六十遍裁判したとか裁判に回數の多いのを名譽のやうに思つて居る、随分厄介な國民である、今印度ではカルカッタを初めとしてマドラス、ボンベイ等に五つの大學がある、大學の組織は各科の學生共皆法科を兼修することになつて居る神學を學ぶ者も法科を學ぶ、歴史科でも法科を兼修する、理科も醫科を法科兼修するやうになつて居る、それは法科を學修して居れば裁判官、司法官になるこ

とが出来て融通が利くからである、依つて他の學科の教授は晝間であるが法科に限つて夜間講義を行ひ何人にも之を學び得るやうになつて居る、そして醫者や理學で飯が食へなくても、法學を修めて居れば人の金を繰り上げて裁判事に關係して生活して行くことが出来る、是が印度大學生の目的であるのであります、亡國の民は皆腐敗して居るものか知れませぬが、世に印度人程依頼心を有し、乞食思想を持つて居るものはあるまいと思ふ、印度にはボクセスと云ふ言葉がある、是はサンスクリットでもなければバリーリ語でもない、西方より入り來つた種族が持つて來た亞利比亞語であらうと思ふが、心付と云ふ意味である、俾夫の酒手、御茶屋の酌婦の心付、宿屋のお茶代は勿論の事誰でもボクセスを呉れと云ふ、友を訪ねて行けば門番が主人公に案内して呉れる、そして歸る時には必ずボクセスを要求される、幾らでも取らなければ承知しない、又巡査が時々ボクセスを呉れと云ふて來る、貴様にやる必要があるかと怒鳴つてやれば、私は毎日貴方の家の

前を必ず二三回宛巡廻します其に對してボクセスを下さいと頼む、巡査が町中を巡邏するのは當然の職務であるにも拘はらずボクセスを要請して止まない、若し一圓ばかり金をやれば手を合せて拜む、實に不見識極まる巡査ではないか、又郵便配達夫からも年に二三度宛ボクセスの請求を受ける、配達夫が言ふには日本から木村様宛の手紙が來れば誰れにも渡さないで必ず貴方の所へ持つて來るからボクセスを呉れと云ふ、斯う云ふ風であらゆる者がボクセスを請求する、若しそれをやらないと彼奴はボクセスを呉れない失敬千萬な奴だと云ふて腕力に訴へても取らずに置かない、單り下層社會に限らず政治界に於ても經濟界に於ても、印度人全體にボクセス思想と云ふものが養はれて居る、是等の點は我々が深く考へなければならぬことであると思ひます、併し乍ら是が果して眞の印度の現状でありませうか、英本國に居る英人と印度に居る英人とは大分性格も品性も違ふけれども、印度に居る英人を初め外國人は印度人をば調育すべからざるものとして犬

か猫のやうに取扱つて居るが、白哲人種の黒人に對する待遇は餘りに殘酷である、成程多くの印度人は劣悪な品性を有し泥棒根性があつて困る、其處らに在る物何んでも取つて行く、私も始めの間は鏡を掛ける事を知らなかつたので物を取られた、日本では私のやうな貧生の處には泥棒はやつて來ないが、印度にはコンコン泥棒が多くて何處へでもやつて來る、其癖短銃や刀を持つて押入るやうな大賊は決してない、鉛筆一本、ハンケチ一枚、紙一枚の泥棒である、繪葉書でも書物でもインキ壺でも何でも蚊でも出して置けば無くなつて仕舞ふ、だから机の上に物を置けない、抽出しにも箱にも總てのものに鏡を下ろす、自分の部屋にも門にも鏡と云ふ風で非常に不便である、どうしても鏡が必要であつて左右二つのポケットは鏡で以て一杯になつて仕舞ふ、さうして印度人は非常に口先が巧い、嘗て或人が私に御世辭を並べて招待するから是非來て呉れと云ふので、日本で御馳走になるやうな考へて餘り不體裁な扮装ではと無理に無い洋服を借出して行つて見

ると、定めし鄭重な料理でも出る事と思ひの外、例の手鼻汗で光つて居る非常に不潔な茶碗に入れた紅茶を汚ない盃に載せて出した、其の紅茶も茶碗に半分ばかり入れただけで何だか臭氣を帯びて居る、それに添へて麵麩とバターを出したが其のバターが又非常に悪いバターで腹が減つて居ても食へるものでない、そこで誤魔化して、實は今日は他にも御馳走に招かれて行つたから失禮しますと言つて減り切つた腹を抱えて逃げ出したことがあつた、實際印度人の言ふことを本當にすると飛んでもない事になる「お前等は口の人であつて心の人でない、口には非常に親切が溢れて居るけれども心は別物である、何故さうなつたか」とは私が屢彼等に注意した處であつた、是が果して眞の印度の狀態であるかと云ふに決してさうではない、是は我々が印度の皮相を瞥見した時の觀察である、マドラスやカルカッタへ汽船で立寄つて見た表面の印度は斯う云ふものである、其の裏面に入れば違つた精神の潜んで居る一種の印度がある、之を名付けて古い印度と云ふ、古なが

らの文明が傳はつて居る印度である、私が梵語を研究しに行き、又眞の印度を知らんと欲して行つたのは上述の新しい印度ではなく此の古い印度であつたのである、私は新しい印度を極力排斥すると共に、古い印度を非常に尊重し賞讃し嘆美し之を日本に紹介することを切望して止まないものである、古い印度とは遙に三千年の昔に於て燦爛たる文化の華を咲かしたるヒマラヤ山下カンデス河畔の一大文明國の今日迄傳はつて居るものであります、哲學と言ひ宗教と言ひ文學と言ひ天文化學と云ひ、總ての上に於て大なる發達を遂げて居た印度文明は、支那朝鮮に傳り日本に來つて我國文明の根本を爲し、殊に東洋に於て赫々たる光輝を放つて居るのみならず、西洋に對しても偉大なるインスピレーションを與へて居る、今日世に喧ましく論ぜられて居る獨逸のオイッケン、佛蘭西のベルグソンの哲學なども、印度東洋思想の受賣りに過ぎない、又其前のコント、ヘーゲルも印度哲學の取り次に外ならぬ、印度には中世の獨逸の哲學よりも希臘の哲學よりももう一

層深いものがある、シヨップペンハウエル以上の哲學もあれば文豪ゲーテをして讃嘆せしめたる文學も印度にある、世界の三大宗教中最も大なる佛教を生み、絶大の大人格者を出し、深玄なる哲學を有し、大文學を有した往古の印度は消滅して仕舞つた譯ではない、今尙嚴として存在して居るのであるが、日の光の雲に蔽はるゝが如く何物かに蔽はれて居て見えないのである、其の雲霧を拂ひ除いたならば再び昔の燦たる光明を放ち、嘗て世界文明の寶庫たりしが如く今日に於ても亦二十世紀の社會文明の大寶庫たるべきものであると思ひます、古い印度と新しい印度とは總ての點に於て大に反對して居る、人の性格品性も頗る異つて居る、例へば古い印度人は虚飾と云ふことを非常に排斥する、先づ服装から言つても徒に外見を美にするやうなことはなく、結婚式のやうな場所へは日本ならば袴羽織かフロックコートでも着けて行くべきであるが、彼等はホワイトシャツ一枚と猿又だけで靴下を用ひないで素足へ靴を穿くと云ふ風である、さう云ふ滑稽な扮装で些

も構はない、一昨年文學大會の開かれた時私の師匠が矢張りホワイトシャツ一枚で大會の席へ臨まうとしますから、何ぼ何でもそれではいけませんまいと言ふと、お前は日本人であり乍ら日本の着物を棄て、外國の着物を平氣で着て居る、さう云ふ心掛けてはいけない、我が印度は今英國の治下に居るが他國に司配されるればとて他國人の衣服を身に着くるには及ばぬと言つて大層威張つた、斯う云ふやうに古い印度人は外見を飾る事を惡み精神を以て第一として居る、我々が此の世に何物かを實現せんが爲に生れて來て居るものである、金を儲けるとか事業を成すとかいろ／＼あるが、其の最後の問題は人生の大本能を發揮し實現するに在る、我々の家庭を實現し國を實現し世界を實現すると云ふことが理想である、それで古い印度人は人間の一生を四つに區別して居る、第一に出生より十九歳迄て之を修養時代と稱し、社會に立ちて活動上必要なる萬般の研究に努むる時代で、此の間は非常に質素にて戒律を堅固に守つて修養も積まなければならぬ、其の次は家

庭時代と稱するもので、印度の四種の階級に依つて夫れ／＼違ふけれども、大體二十歳から四十五歳迄て、此の時代には家に在つて業を働き社會の事業に盡す時である、嫁を貰ひ自分の家庭を修め業務に精勵して金を作り、又は田地を耕すなど活動の時期である、其次は隱遁時代と稱して隱遁する、自分の子供に財産も何も數も一切譲り渡して仕舞つて、自分は單に宗教的清淨なる生活を送るものである、最後の時代には彼方此方を乞食して歩く大哲學者的生活を爲して此の世を終るのである、而して人生の究竟の目的は第一の修養時代に在るに非ず、第二の家庭時代の家郷に在つて勤勞に従ふのも亦人生の目的と言へない、世間を離れて隱遁し宗教的哲學的生活を送るのを以て眞の人生の目的として居る、彼等の生活は斯の如く意味深きものである、彼等は宗教に生れ、宗教に起き、宗教を語り宗教を食ひ、而して宗教に生き宗教に死するものである、生れてから死する迄、朝から晩迄、終日終夜、宗教に反することを爲すを以て罪惡として居る、結婚を

するにも宗教に依つて結婚し、水を一杯飲むにも宗教に依つて飲むのである、尤も我々の眼から見れば、或は迷信とも保守とも言へやう、乍併そは味はひもあれば趣もあるのである、理屈々々と云ふて世の中の事を唯理屈ばかりで解釋しやうとすると大なる誤謬を生ずることがある、世には理屈で説くべきこと、味はふべきこと、二つあることを忘れてはならぬ、例へば砂糖水を飲んで甘いと云ふ、其の「甘」と云ふ感じは味はふべきものであつて、説明すべきものではありませぬ、何人の口を借りても甘いと云ふことを説明するのは不可能である、何故ならば、それは味はふべきものであつて説明すべきものでないからであります、オイケンを通じて來てもベルグソンを呼んでも、カントでもヘーゲルでも之が説明は出來ぬ、味はふべきものは宜しく味はふべし、理屈を以て説くべきものは宜しく理屈を以てすべし、宗教は味はふべく、哲學は理屈を以てすべし、而して印度人は森羅萬象を理屈攻めにし研究せず、直覺的に味あはんとして居る、例へば太

陽の光を見ても之を物質的の太陽とは見ないで、梵が太陽となつて現はれて我々に熱と光とを與へ、我々をして生活を爲さしむべく慈悲を垂れて居ると云ふやうに宗教的意義を加へ深い味を以て味はつて居るのである、是は單に太陽ばかりでなく、山川草木總て斯う云ふ思想を以て見て居る、其の思想と云ふものは如何にも美しい綺麗な言ふに言はれない玄妙なものであります、それから古い印度人は非常にゆつたりして居る、日本人は實にコセコセして居る、私も此の「コセコセした日本へ歸るのかと思ふ」と歸朝するのが實に厭だつた例へば茶菓子一つ勤めるにも、おいしくはありません、ぬが一つお食り下さい、ハイ有難うございます、どうか一つ取つて下さい、ハイ結構です、さう御達慮しないで、では頂戴しますと云ふやうに二遍も三遍も御辭儀をしてそれから取ると云ふ風にコセ付いて居る、所が印度人は食はないか、食ふと云ふだけで至極簡單瞭である、要らぬ遠慮など些しもしない、人を訪ねても今日は腹が減つたから飯の用意をして呉れないかと

云ふと直ぐして呉れる、餘計な遠慮をしやうものなら腹が減つたつて飯を食はして呉れやしない、何でも遠慮しないで無邪氣に正直にやるのを宜しとする、さうして極めて質樸である、初対面の印度人が私に對して木村さん嫁さんを持つて居るか、お前は金持か貧乏人かと突然質問する、貴様達は禮儀の知らない妙なことを尋ねる奴だと怒鳴り付け度くなるが、それは私を他人ではない内輪の者だと思つて打ち解けて質問するのであるから怒つてはいけぬ、成程内輪同志であつて見れば、第一に妻帯の有無や貧富を質問するのに些も不思議はない、恰度兄弟姉妹のやうに見て話し掛けたのであつた、私も一度は怒つたが後に其の綺麗な質樸を愛するやうになつた。

私が印度へ行つた時は恰度日露戦役後であつたから印度人の眼に映じた日本の國と云ふものは、露國に捷つた強い日本であつた、それで非常に大持であつた、印度では乃木さんと東郷さんの名を知らない者はなかつた、マドラスに布教に行つた時、或人が日本と云ふ

國はヒマラヤ山の傍かと問ひました、私も餘り馬鹿馬鹿しい質問だから冗談にガンヂス河の畔りだと答へてやりました、印度人が日本と云ふ國の存在を知つたのは日露戦争の結果である、戦捷國の光明、赫々たる日本を初めて印度人が知つて、少し日本を買過ぎて居た處へ私が行つたのだから、非常に款待されました、兎に角、日本に非常な同情を寄せて居た影響に依つて私共は勉強する爲に頗る便宜を得ました、此處で一つ考なければならぬ事は、彼等古い印度人は非常に精神修養に力を注ぎ、朝起されれば如何なる用事があつても先づ宗教的修養をすることである、印度人に今日取るべき所は禪の修養であると思ふ、宗教的修養をしなかつたならば決して人間の人生の意義を發揮することが出來ないと云ふことを認めて居るのは印度人のみであらう、而して餘り肉食をしない、重い食物を避けて軽い食物を攝つて居る。肉食をしようとどうしても高い心を保つことが出來ない、されば宗教又は哲學を研究する人は菜食者ばかりである、私共も野菜で通し

て來た、佛敎に於て肉食を禁止した所以も斯う云ふ所からではあるまいか、日本人は何でも構はぬ食ひさへすれば宜いと云ふ風に考へて居るが、食物と精神とは密接なる關係を有して居るから、本統に宗教的生活を送らんと欲せば、食物に就いても相當に考慮を拂はねばならぬ、彼等印度人は宗教的生活に要する物を食ひ宗教的生活に必要なことを爲し、風俗と隔り神に仕へ神に接し、人生の意義を發揮することを以て理想として居る、而して上述の如き古き印度は、今日に於ては働もすれば新しき印度に壓迫せられ、昔のやうな精華を發揮し得ざらんとしつゝあるは甚だ遺憾であるが昔の印度に復活せんが爲には心密かに日本に依頼して居るのである、日蓮上人の御妙判中に「佛敎は西より來つて東に弘まりたり東の佛敎は再び西に入る」と云ふ意味の事が説かれてありますが、是は獨り日蓮上人のみならず、各宗宗祖も一度日本へ入つて來た佛敎は再び西に向ふと云ふ事を言つて居る、日本人ばかりでなく印度人も宗教的文明が東の方から再び入り來ると

云ふやうな事を何となく頭の中に考へて居る、さう云ふ思想は現在の印度人ばかりでなく、數代前からの印度人の頭に東から何か來ると云ふ思想が潜んで居た事は疑ない、宗教上の改革に於ても思想上の改革に於ても政治的方面に於ても、何か東の方から來るのではあるまいかと豫期して居る様子があつた、彼等が歌の詩の中に「西藏人、支那人、日本人それは印度から移住した國民である」と云ふ意味のものがある、印度人の子が西藏、支那、日本へ移つて繁榮したものであると思つて居る、彼等は西藏、支那、日本は我が妹の國、弟の國だと思つて居るが、其の弟妹の國は斯の如く隆盛になつて居るにも拘はらず、其の文明の母たる印度は此の悲惨なる境遇に居り悲惨なる生活をして居る、如何に深い宗教的思想を持つて居ても之を發揮する機會がない、之を吐露する場所がないと云ふことを嘆いて居る、茲に於て私が思ふに、新しい印度と古い印度と一つにならなければどうしても圓滿なる將來を見るこゝとが出来ない、此の印度を統一し新文明を紹介すべき

任務を有する國は、西藏でも支那でもなく、ビルマでも暹羅でもサイゴンでもない、或は日本帝國ではあるまいかと思ふ、然るに日本の佛敎家などは始終内輪喧嘩ばかりして居て、大局に眼を注がないのは返す返すも慨嘆に堪へない、早く日本の純粹の佛敎を翻譯して日本の大乘佛敎を獨逸、佛蘭西、英吉利、亞米利加の各國へ紹介して其の國の宗教哲學と戦はなければならぬ、或は印度語に翻譯して再び印度へ道輸入すべき時代ではあるまいか、日本が將來南に發展すべき事に就いて、政治家は政治家らしい考を抱いて居やう、宗教家も亦宗教家らしい考を持つて活動しなければならぬ、今度の歐洲戦争は單に國と國との間の戦争でなく、此の戦争の結果として世界の文明が大に一變するであらう、此の大戦は從來の文明を破壊する戦争でなければならぬ、即ち物質的文明の時代去つて精神的文明の時代來り、西洋文明影を潜めて東洋の文明が再び世界に光輝を放つ機會を呼起す所の文明の一大轉換期でなければならぬ、殊に此の三四年來西洋の人々も、彼等の

持つて居る文明に依つて其の心の空虚を満し、心の煩ひを醫し慰むることを得ないで、東洋の文明を慕ひ求むるの聲が屢々聞かれて居るではないか、然るに悲しい哉、東洋に人なく、彼等の要求に應ずべき人なきを奈何せんやと云ふ有様であります、由來日本は東洋文明の粹を基礎として形成せられ、今や歐米の物質的文明を攝取して之を消化し、東西南洋の文明を打つて一丸となして新しい文明を生み出さんとして居る、其の新文明を世界に紹介して世界の人が要求して居る精神的缺陷を満し、以て東西の物質精神兩文明の解決を爲すべき任務を我々は持つて居るのであるまいか、六百年の昔に於て日蓮上人も仰せられて居るのであつて、我々は日蓮主義を奉ずるものであるから、單に日本を柱となるばかりでなく世界の柱となり、單に日本の眼目となるばかりでなく世界の眼目となり、單に日本を大船にて止まず進んで世界の船舶となり、日蓮大上人の大理想を一閻浮提に發揮弘通せんことを切望して止まないのであります。

日本の柱

清水梁山

今日は日本の柱と云ふ題で少しく御話し度いと思ひますが、是は單に理論談ではなくして實際日本の柱なるものが存在して居るのですから、其の事實談を先づ申し上げ、それから自分の考を申述べの積でありませう、此の話をしたいと思ひましたのは、日蓮上人の開目抄の中に「我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず」とありまして、其の日本の柱と云ふ言葉に就いては、今日迄既に之を理論的に説明した人は澤山あるけれども、歴史上事實上の日本の柱に關して説いた人はないから、少し風變りてはあるが、それを述べて見たいと思ひます、日本の國體の初原義としては、諸冊二尊の創造と云ふ事が根柢になつて居る事は申す迄もない、其諸

冊二尊の大八洲創造に就いて歴史の上に現はれて居る事柄は、即ち天瓊鉾を以て大海原を搔探られて其の鉾の先から滴りが落ちて、夫が大八洲の山川草木と云ふものを形造つたと云ふのである、さう云ふ風に瓊鉾が日本の國土創造の根原であり、是よりして青人草も繁り榮ゆるやうになつた、此鉾を天瓊鉾とも言うし神の御柱とも言うし、或は齋柱とも言うし、種々の名稱が種々の書物の上になつて散見されますけれども、指す品物は何れも同一である、そこで之を架空の創造談と評して仕舞ふならば論外であるが、私共國體を研究する上に於ては架空とか或は妄想とか云ふことには如何してもしたくない、私は諸冊二尊が大八洲を搔探られた天瓊鉾とは事實上果して如何なるものであつたか、夫

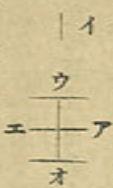
が此の日本の國體に如何なる關係を有するものであるかを、歴史上に現はれて居る事實に徹して解決して見たいと云ふ考を先年より持ちまして、其の事に就いては、既に「日本の國體と日蓮上人」と云ふ拙著の中に書いて世間に問うて置きましたが、殊に本年は自分共に取り最も感想の深からざるを得ぬ御即位の大典が舉行さるゝ芽出度き年に於て、日本の柱と云ふとに就いて卑見を陳述するのは愉快に堪へない次第であります、而して此の天瓊鉾と云ふものは天御中主尊より諸冊二尊へお授けになつたもので、此事は神典の上に於て明かな事實である、夫をお持ちになり天の浮橋の上にお立ちになり、大海原を搔探られたのが天地創造の根原である、然るに世の一部の人々は之を以て恰も架空の妄譚の如くに思惟して居るが、私共に於ては之を實在の事柄として而も天瓊鉾は今日迄傳へ残されて居る日本の柱であるとして、そして上人が開目抄に「我れ日本之柱とならん」と仰せられた所以を十分世の中に知つて貰ひたいと思ふ、抑天瓊鉾と云ふものはどんな

形をして居るものであらうか、之に就いては種々の説もあり、又瓊鉾の名稱に就いても區々に分れて居りますが、枝葉に亘る事は凡て切り捨て、唯主なる學説としては本居宣長翁と平田篤胤翁とである、本居翁の説に依ると天瓊と云ふ鉾は玉を以て飾つた誠に綺麗な貴きものであると言つて、之は形の上から瓊鉾の解釋を試みて居ります、それから平田先生に至つては、一層進んで瓊鉾なるものの性質はどんなものであるかと云ふに、極く古き祝詞其他の古記類を讀むと云ふと之を天御量の柱と稱へて居る、天御量の柱とは何であるかと云ふに、之は一口に言へば尺である、即ち長短を量る處の器具であると云ふことを根柢にして調べて居る、それは皇國扶桑考と云ふ平田先生の著書二巻の中に詳細に述べてあります、私等もどつちかと言へば平田先生の説が最も宜しいと思ふ、而して瓊鉾は昔の尺であつたとすれば其の長さは果してどの位あつたか、神代の我國の尺度の制度はどう云ふ風であつたか、今の尺ならば衣服の長さとか人間の丈を量る道具に用ゆ

るが、神代の尺は何に用いたものであるかと云ふことを研究して見ると、其の根原は餘程妙な所から現はれて居るものである、即ち日本の言語文字の一番の根原は何であるかと云ふに天瓊鉾即ち天御量の柱か本である、之に就いて日本は言挙げせぬ國であるから文字がないと云ふ學說も昔からないではないが、それは未だ研究の足らぬ人の説であつて、我國には往古から既にアピル文字と云ふものがある、是は今九州の下部家に所藏されてあります、それから又天の種子尊の傳へられた種子文字と稱するものがある、要するに文字と云ふものは昔の音聲で音を傳へたものである、其の時代の我國の音聲は不思議にも佛説と符節を合する如くである、私は嘗て涅槃經を讀みました時分に、其の中に釋尊が十四音の音聲を説いて迦葉菩薩が必ず十四音を學び、之を以て後世に流布させます未法に弘通させますと堅く誓ひを立て、居る事が記してあつた、之に依つて考へて見るに、如來の教の末代に弘通することは十四音と云ふものに何か深い因縁が存在して居りはせ

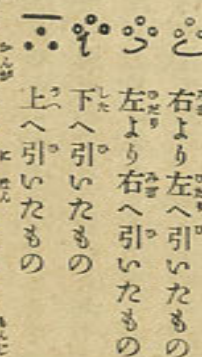
ぬかと氣付いて、段々調べて見ると十四音とは勿論五十音であります、佛典に於て音聲を説いたものは涅槃經、大日經を始めとして種々ありますが、涅槃經大日經以外のものは文字の數も缺けて居る、それで涅槃經大日經に就いて考へて見ると、所謂十四音は字母であつて、字母とは五十音の最初のアイウエオとカナタナハマヤラワと云ふ一番上の行とであります、そして字の意義が具さに説き示されて居る、眞言、密教、陀羅尼など云ふものも、要するに其意味は此解説に外ならぬのであります、諸我國の文字は前述の通り神代より二通り傳はつて居るが、種子文字と云ふのは今日我々の使用して居るアイウエオの五十音である、他の一のアピル文字と云ふのはアイウエオと言はずウオイエアと云ふ順序で、従つて一番上の行もアカナタナなく、ウクスツヌフムユルウと云ふことになつて居る、詰りアイウエオとウオイエアの相違がある、然るに印度の涅槃經の十四音の解釋から行けば、種子文字もアピル文字も同じ所に歸着するのみならず、アピル文字

の方が涅槃經の本義を説明するに極めて都合が宜い、そして是が大瓊鉾に大關係ある議論を生ずるのであります、アピル文字のイと云ふのは眞直に一本の棒を引いたものである、其の右に水平に引いた棒がア、左がエ、上がウ、下がオと云ふ譯である、



詰り眞中の棒一本がイでイを中心として上下左右ウオイアの母音が出来るのであります、之を日本の神典で言ふならば、天の瓊鉾の解釋と一致するのである。天瓊鉾と稱するものは唯一本の棒である、即ち五十音の根本のイに相當する、又諸冊二尊が愈々大八洲の創造を終つた後に、意能基呂島に八尋の殿を造つてお住ひになつたと云ふ其の御殿の形は、五十音の形即、因斯う云ふものであります、詰り諸冊二尊、世界創造は五十音に基いて居る、言葉を変えて言ふならば、凡そ世界に於ける言語の根本は日本に基いて居る、諸冊二尊の創造に依つて始めて全世界の言語も全世界の音聲も

生じたのである、涅槃經大日經其他の音聲も日本の八尋殿の形が其儘傳はつたものである、斯の如く世界中の文字と音聲は日本の神代の教に従ふものであり、日本の五十音は天の瓊鉾と云ふ一本の棒が根柢であると云ふ事になつて居る、又梵字の上に於てもアピル文字と同一なることを知る事が出来る、例へば梵字、中にイ字の三點と言つて、斯う云ふ字がある、是はアピル文字のイの一本の棒を堅にして見たせのに外ならぬのである、どうして同じものであることが分るか云ふに、梵字を書くにも恰度アピル文字のイの上に棒を引き下へ棒を引き、或は右或は左に棒を引くが如く梵字にも其通り上下左右へ棒の變形を引くものがある、



是等を考へれば日本のアピル文字も印度の梵字も共に一本の棒が中心となつて、さうして種々の音や字が

組立てられて居ることが判ります、其の棒とは取りも直さず日本の神の御柱と云ふものであります、此の御柱が中心となつて文字音聲が出来、又社會の萬般の状態の根本も之に基くものである、今日て言ひますれば、政治でも宗教でも商業でも工業でも先づ此の中心が確立して然る後に存在するのであります、此の天の御柱を總ての事物の中心にしなければならぬ事は神典の上に於ても明かに示されてあります、伊弉諾の尊伊弉冊の尊が美斗能麻具波比を遊ばす時分に天の御柱を御廻りになつたと云ふことが夫であります、伊弉諾の尊の雄神の方は神の御柱を左から右に廻られた。

ア 東

北ウ(天の御柱)オ南

エ 西

之を圖に就いて説明すれば、雄神は左から右へ、アオエウ、東南西北と云ふ順序である、伊弉冉の尊の雌神の方は右から左に、北西南東と廻つて二人が互に顔を見合すや、雌神の方から先づ阿那邇夜志愛登賣古袁

阿那邇夜志愛登賣古袁と仰せられ始めて夫唱へて婦隨ふと云ふ實を擧げて生れたのが天照大神であります、斯の如く我國に於ける夫婦の道は夫唱婦隨と云ふのが嚴として動かすことの出来ない根本原則になつて居るのであります、其の大本はと言へば、神の御柱が萬の物の根本となつて居るのであります、日蓮上人が我れ日本の柱とならんと仰せられたのは、上人自らが斯の如き意味に於ける日本の柱となり、日本の中心日本の根本とならんと誓はれたものであると私は斷言して置きます、而して今日位家庭の道の亂れて居る時はあるまい、男女二人が寄り合ひさへすればそれで宜いと思つて居る、若し夫婦の間に神の御柱がなかつたらば夫婦でない、唯男と女と一緒になれば夫婦なりと思ふならばそれは禽獸の野合的夫婦である、我國の神代より定められたる夫婦は神の御柱を中心としなければならぬ、神の御柱があれば男は左より右に女は右より左にと云ふ道があつて、夫唱婦隨も亂るゝ所がないのであります、どうも今日の日本の家庭を見ると神の

と言つた、是は雄神の方から先へ阿那邇夜志愛登賣古袁と仰つたならば宜かつたが、雌神の方から第一に言葉を掛けたのは悪かつた、そこで伊弉諾の尊も夫に應じて阿那邇夜志愛登賣古袁と仰つて美斗能麻具波比を爲されたが其結果として出来たのが天水姪子尊と云ふ不具の神様である、國としては淡路島が出来たのだと云ふ、不具が出来たのは詰り雌神が先へ言葉を掛けて雄神が夫に應ずると云ふやうに順序次第を誤つた爲であります、即ち今日の俗の言葉で言ふならば、女が采配を振り過ぎて亭主が御供になつたと云ふ有様である、甚だ失禮な言葉を以て例にしまして畏多いことですが、さう云ふ風で、夫唱へて婦隨ふと云ふ夫婦の道を破つた爲に、最初は遂に天水姪子尊のやうな不具を生じたのであります、夫からは是ではいけないと云ふので、諸冊二尊が天上して天御中主尊の許へ行つて尋ねた處間違つて居た事を教へられ、再び新たに神の御柱を廻り直して今度は伊弉諾の尊の方から先へ阿那邇夜志愛登賣古袁と仰せられ夫に隨つて伊弉冉の尊が

御柱はないのだらうと思はれます、若しあれば結構です、此間も大崎の學校で面白い話がありました、それは四條金吾殿御返事の中に「唯女房と酒打ち飲みて南無妙法蓮華經と唱へ給へ」と云ふ御言葉がある、世の多くの人は此の御言葉を尊い有難いと思ふのは「唯女房と酒打ち飲みて」と云ふだけで、其の直ぐ次に連續して居る「南無妙法蓮華經と唱へ給へ」と云ふことには餘り注意を拂つて居らぬやうである、併し乍ら女房と酒打ち飲んで男と女とが向ひ合ふだけではないけない、南無妙法蓮華經と云ふ神の御柱がなければならぬ、南無妙法蓮華經の神の御柱無くば法華經の夫婦でない、世間の大部分の人達は女房と向ひ合つて酒打ち飲んで徳利を神の御柱として居るやうであります、法華經の夫婦と云ふものは決してそんなものではないのである、諸神の御柱たる天の瓊鉞は伊弉諾、伊弉冉兩尊が用ゐられた後、未だに今日迄傳へ残されて居るか、それ共無くなつて仕舞つたかどうかと云ふ研究であります、此間も或人が私の處へ來

て、法華經の中に八歳の龍女が珠玉を釋尊に奉つたと云ふ事が書いてあるが、其の珠玉は今日何處にありませうか、若し其の行方が判らないならば經典に書いてある種々の事は皆當てにならぬと云ふやうなことを言ひました、成程それもさうである、其の昔の神典に記されてある天の瓊鉾の行方が分らず又其の瓊鉾の意味が不明であるならば、我國の諸冊二尊の造化は殆ど架空の妄譚と言はれても仕方がない、而して萬一此の國體の根源たる諸冊二尊の造化が架空の妄譚となつたならば、我が國の將來は由々敷大事であります、無理に古記を信ぜよと云ふのではない、私は歴史上事實上、公明正大なる議論に依つて我が國體の根本義を探究せんとするものである、そこで神の御柱の行方の存在を進んで調べて見たいと思ふのであります、此の諸冊二尊の神の御柱なるものは、即ち伊勢の大廟に残つて居る齋柱と云ふものであります、之を言葉と換へて申すならば、諸冊二尊の事は我が國體として最も重宝すべき事であるから、國土創造の時に用ゐた天瓊鉾と

云ふものは、極く大切なものである故、それが我が宗廟の中心として伊勢に祭られて居るのである、即ち我が日本の國體として君民の關係としてどうしても伊勢宗廟の天瓊鉾と云ふものが國體の原義を一つにしなればならぬのであります、而して平田篤胤氏は神の御柱即ち天瓊鉾は前述の通り長短を測る器物であつて、恰度曲尺の一尺餘、尺の八寸に相當するものである、此の八寸が十合して八尋となり八尋殿と言ふ言葉は是から生じたものであると言つて居ります、それから尙一層進んで伊勢の宗廟に在る齋柱の長さはどの位あるかと云ふに、是は無論一丈六尺あるべき筈であります、然るに中世に於て亂暴にも不都合にも古代の事を少し知らぬ者共が、伊勢大廟改築の場合に神の御柱を切り詰めて一丈二尺にして仕舞つた事があつた、現今の神の御柱はどうなつて居るか、若し一丈六尺でなかつたならば實に之は古代の制に背くものである、其の神の御柱が短くなつたと同時に、不思議にも我國の主權と云ふものは武門の手に移つて仕舞つて誠に恥かしい歴

史が八百餘年間繼續したのであります、それは措置さましてどうして一丈六尺と云ふ數が出たかと云ふに最初アオエウ、ウエオアと兩方から御柱を御廻りになりそれから更に上天して天御中主尊に御尋になつた後再び御廻りになり四四十六と云ふ數が生ずるのであります、所て茲にもう一つ祝詞類などを見ますと云ふと「天の御量の柱は大神の御量りに委せ奉りて」と云ふやうな事が記してある、詰り神様の身體の寸法に當て嵌めてと云ふことである、之に依つて見れば、我國の御先祖の神様は一丈六尺と云ふ御神體であつたと云ふことが分る、又法華經に十六王子と云ふて、東西南北の四方に十六の王子が居つて十六と云ふ數が出て居る、それから本門の戒壇の壇上と云ふ儀式の場所にも是であります、尙本年行はれる御即位式の壇上と云ふものも、矢張り十六王子の法華經の壇上の姿と少しも變るまいと私は信じて疑はないのであります、又毎年一月行はるゝ四方拜の御儀の四方を拜する順は、此順序で東南西北と云ふ風に拜するのであります、是は

九重奥深くの御儀式故私共拜することは出来ませぬけれども、古記録に依つて確であります、斯の如く古の神隨の教は天瓊鉾と共に今日迄傳はり日本の柱となつて居るのであります、之を小にしては一家の夫婦關係、大にしては國家の君臣の關係、皆神の御柱が中心となつて居るのである、そこで神の御柱は日本國の柱であるが、之を法華經に當て拵めて言ふならば、寶塔品の二佛の結跏趺坐の形式は即ちそれである、法華經は印度の佛法であると共に又日本の佛法である、そして法華經の寶塔品は日本の古事記と符合すべきものであると私は信じて疑ませぬ、釋迦牟尼佛は雄神である、多寶如來は雌神であります、雄神と雌神は妙法蓮華經の五字を中心として左右に控へる、釋迦牟尼佛は雄神であるから上座に坐る、又雄神の釋迦如來が説法して雌神の多寶如來は之を聽聞する、即ち夫唱婦隨であります、詰り釋迦牟尼佛は伊弉諾の尊多寶如來は伊弉冉の尊、妙法五字は神の御柱に外ならぬのであります、二佛が妙法五字を中心として七寶塔の中師子座上

に相座し給ふ事と、諸冊二尊が神の御柱を中心にして左右より廻られたことは、何れも夫婦の道の原本である、處が今日の世の多くの夫婦の有様はと云ふと、多寶如来がベチャクチャ饒舌つて御釋迦様を隅の方へ押籠めて仕舞つて、組打ちや喧嘩を始めて摺古木や摺鉢が躍り出す、「此の野郎」「此のお多福」と互に怒鳴り散らすと云ふ騒ぎです、飛んでもない法華經が出来、是れ畢竟夫婦の間に神の御柱たる妙法五字がないからであります、日蓮上人が北條氏を責めた立正安國論の立正とは言ふ迄もなく正法を立てると云ふ事であり、正法を立てるとは家庭の上に於ては神の御柱を立て、夫婦の間を圓滿ならしめ、國の上に於ては君臣の關係を明にする神の御柱を立てなければならぬと云ふことである、語を換ゆれば、立正とは立憲と云ふことである、今日の日本の憲法は先帝陛下が御發布になつたものであるけれども、其の本義は諸冊二尊が國土創造の中心にした神の御柱に外ならぬ、それを先帝陛下が文字の上に表はし、條章に定めになつたのであります

す、日本の憲法は神の御柱と共に神代から存在したものである、我國に神代からの立憲國である、神の御柱は即ち憲法である、神の御柱が國土創造の元を爲して是が我が國宗廟の中心となつて居るのであるから、日本國民としてはどうしても其の神の御柱を忘れてはならないのである、又我々としては妙法五字が中心であるから瞬時と雖も之を忘るゝ事は出来ぬ、神の御柱を立てなければ國家は必ず亡びるが如く、妙法五字を離れる日蓮主義はないのであります、我々日蓮上人の御姿を拜しまするに、左の手は經卷を握つて右に笏を持つてをいてになる、左の經卷は法華經の壽量品であつて、右の笏は即ち王法である、左は妙法の五字右は神の御柱である、上人は實に此の御精神を以て生涯奮闘されたのである、されば上人の說法は洵に目醒ましかつた、汝等は壽量品の本佛を知らないかと云ふ時に左の手が高く上る、汝等は我國の天皇陛下を知らないかと云ふ時に、右の手が出る、兩方から攻撃したのであります、斯く折伏弘通に努力せられたから北條氏に

取つては矢も楯も堪らなかつた、唯壽量品のみであつたならば左迄上人を恐れなかつたかも知れない、されど右の手に笏を以て武門退治をした爲に、併ては上人に對しあらゆる迫害を加へなければならぬことになつたのである、此の上人の左右兩手の精神氣魂を失つたならば弟子擡那と言へないのであるが、悲しい哉、足利徳川を経て今日迄非常な迫害壓迫を被つた爲め情氣を生じ、法華經の壽量品の方の權實本迹の左の手にかり振り廻して、王法の發揮を怠つて来たのは残念千萬である、實は今日迄の御祖師様の御手は右の方が缺けて落ちて仕舞つて居たのである、今日の急務は全く其の右の復活するに在るだらうと私は信じます、左手ばかりで消極的に前は念佛言ふと地獄に行くから法華經を唱へて淨土に行けと云ふばかりでなく、右の手を出して積極的に印度の佛教以上の日本の王道としての本門壽量品を弘通しなければならぬ、時は正しくさうなつて居るのである、將來の日蓮主義は此の方針で進んで行かなければならぬ、夫れが若し缺けて依然として左ばかりの弘通をやつて行くならば、何時迄も日蓮上人をして不具者たらしむるのみであります、

此點に於て私は傳道者僧侶諸君に大なる反省を乞はざるを得ないのであります、今日の君臣の關係は危險状態に陥らんとし、漸く神の御柱の意義を失はれんとしつゝあるは實に憂慮に堪へませぬ、凡そ家庭の上の於ても、國家の上の於ても、日本國の柱たる神の御柱の意義を失つたならば、決して其の精華を發揚することとは出来ませぬ、又法華經本門壽量品の中心を除いたならば、何等役に立ちませぬ、上人が我れ日本の柱とならんと仰せられたのは、王法の神の御柱と佛法の妙法五字とを兼ね備へたる日本の柱とならんと斷言せられたものである、我々は此の王法佛法を打つて一丸と爲した日蓮主義を一閣浮提に弘通せしむべく奮闘せねばならぬ、又日蓮は當御門の父母なりと云ふ御言葉もある、御在世の當時は武門武士權を極め王權を奪つて皇室を蔑視し、國體の中心たる神の御柱の意義を失つて居た時であつたので、日蓮は王道を生む父母なりと仰せられて北條氏に肉薄されたのである、又佛道の側から言へば、妙法五字は三千の諸佛を生む所の父母である、王道佛道共に缺くべからず、日蓮主義の宣傳者は左手を發揮すると共に右手をも更に大に發達せしむべく努力せられんことを切望して止みませぬ。

朝鮮宗教視察談

朝倉俊達

佛教の朝鮮に傳來したるは高句麗小獸林王の時代に於て、今を距ること千五百年の昔である。是れより先支那の儒教及文學は、朝鮮人の思想を支配するものありしかども、眞に人心の欲求を満足せしむるに充分ではなかつた、此時に當りて佛教は高句麗を席捲して百濟新羅に入り、非常の急速力を以て全朝鮮人の渴仰を受け様になつて、佛教の勢力は旭日昇天の盛觀を呈したのである、而して政治文藝各般の事皆佛教に靈化せられて、燦然たる文化の華を咲かし、朝鮮國は純然たる佛教國となつたのであるが、三國亡んで世は高麗の末葉に至り、權力に保護せられたる佛教徒は、其本旨を忘れて政教を混同し、且つ名利淫樂に耽るもの

多く、その弊や遂に一國の進運に影響を與ふる様になりました。この機に乗じて李朝の李成桂兵を起して高麗を亡ぼして王たるに及び、佛教の弊毒甚しきを見て僧侶を斥け、十二宗派を嚴禁して教禪二宗の存在を許し、而して人民の信仰上の自由を束縛するの法制を設けましたので、盛大を誇つて居つた佛教の權威は、全く國民精神との交通は絶えて地に墜ちるの悲運に會したのである。爾來李朝三百年間、佛教徒は全く活動の自由を失ひ、僅かに儀式の道具として存在するに過ぎない、今を距る四十年前、時の執政大院君は、景福宮の工事落成に當り京城附近の僧侶を招待せしことありしかば、久しく葬られて居つた佛教徒は漸く頭を擡げ

んとしたが、大院君の志成らざりしかば再びその力を暢ばすの機會なきに至り、依然として傳道を禁ぜられ送死の禮に預ることも出來ないので、堂宇の奥に立て籠りて碌々として日を送るものゝみて、一人として宗教的生命の發現に力を盡すものはない、今の朝鮮に於ける佛教徒は、道念衰へて傳道の活力を有せず、現在一千五百の佛寺と數千の僧侶は在るが、佛燈幽々として暗く、昔し民族性格の上に大盛化を及ぼしたる佛教の現状、觀るも哀れなる有様である、斯の如く佛教は精神的に滅亡の状態に在るから、いかで人民の思想界に正しき信仰があらうか、下層者の間には迷忘の信はあるけれども、活ける佛教の訓化はない、今の朝鮮人は信仰なき國民である、此の宗教の權威を認めざる國と信仰なき國民によりて、其の國の獨立を維持せんとするは無謀の企てである、宗教なき國は亡び、信仰なき國民は進取の氣象がないから、人格は劣等にして發展の見込がない、何たる悲惨なる事でありましよう。朝鮮國の運命汲々乎として夫れ危ひかな。

斯くて千八百三十九年頃天主教宣教師は朝鮮に入り盛んに傳道を試みて漢城に十餘萬の信徒を有するに至りしとの事なれば、基督教徒の布教活動の目覺しきものありしは事實なり、殊に李太王即立の初年、英佛同盟軍の北京を陥れたるの報京城に達し人心動搖するに及んで、宣教師は猛烈なる布教に努め、斯かる禍を免かれんには基督教徒に信賴するにありと説きしかば、諸人多くは十字架を胸に懸けて公然基督教徒たるを表明して茲に事實に國禁令を解いたことになつたのである、けれども基督教徒が果して絶対に朝鮮人の信仰を得たるや否や、基督教徒の熱心なる運動の割合に其の歸依者數なきは奇なる現象と謂はねばならぬ、故に基督教の思想が朝鮮民性に一致し得べきか問題であると思ふ、現在の基督教徒は、到る所に會堂は建設されて居るけれども、眞に神の信者として服従するものは尠ない、從來の佛教よりも稍、勢力を有して居るが、未だ朝鮮人の精神を左右する迄にはなつて居らない、而かも基督教徒は多額の財力と非常の努力を以て運動して居るの

であるが、何等實蹟の見るべきものがないのである。最近我領土と成りしより、信教自由の制を以て隨意に各宗教の傳道を向ふるに至り、我佛敎の寺院布教所の開設及び布教に従事する者は多いが、廣袤一萬二千方里の朝鮮全體には、大なる刺戟を與ふる迄に進んで居らぬ、殊に大正三年末の調査に依れば、日本内地人の移住者は、二十九萬二千二百七十七人を算ふる程であるが、之等内地人の思想を訓練すべき濃潤たる傳道はない、唯だ移住者のある土地に寺院を建て、葬儀法要を營み、宗教的本來の躍動を見ることが出来ない、本願寺や曹洞宗は堂々たる伽藍を建て、居るが、共に葬式佛敎で語るに足らぬ、日蓮宗は其淵源遠く六百餘年前、日持上人一葉の扁舟に掉して、支那大陸を経て南下し、朝鮮半島に獅子吼せられたるは史蹟の證する所、明治十四年釜山に日宗會堂創設せられて以來、朝鮮布教の急を自覺するもの多く、現在十一の寺院と二千戸の信徒はあるが、是皆内地人の習慣的信仰にして、朝鮮人の信仰家は幾人あるか解らないが

少數であらう、僅かに日宗會や普通學校に於て、鮮人布教に従事して居るけれども、之亦微々として甚だ振はない、活ける日蓮主義の生命は無い、斯くて佛敎の本義は朝鮮人に注入することも出来ないし、さりとて内地人が眞面目なる信仰を有するか否やを観るに、海を超えて新領土に生活するの身となるもの、多くは經濟的欲求に驅られて働くもののみで、自己生存の意義を考査して精神の満足を得んとするものなく、極めて低級思想生活である、然るに佛敎家が自から進んで精神開拓の重任を果さんとするの意氣がない、予の視る所を以てすれば、識者は今現に眞面目に活動的宗教の宣傳を求めつゝ居ると思ふ、而して其宗教が厭世的消極的でなく、極めて奮闘躍動を促がすべき教義を有する宗教であることを條件とするであらう、何うしてもこの要求に應じて眞に満足と發展とを與ふる教義は、日蓮主義を措いて他には宗教がない、此宗教によつて彼等に信仰を與へ、而して活ける生命を發動せしめて人生の最後を自覺せしむる様に致したいと思ふ。

教線擴張史

東京

- ▲四月四日品川妙蓮寺降誕會開催 釋尊の主義と人格 征川 日堂
- ▲七日午後二時品川妙蓮寺講演 征川 日堂
- ▲八日午後七時小石川原町本念寺講演 石川 顯隆
- ▲十一日午後一時統一閣日曜講演 高木 本順
- ▲十三日午後七時淺草新谷町壽仙院講演 關田 日城
- ▲十五日午後六時小石川白山會講演 關田 日城
- ▲同日午後七時淺草南松山町法成寺講演 三上 義徳
- ▲法華經の真意義 關田 日城
- ▲十八日午後一時統一閣日曜講演 水野 乾心
- ▲生活の要義 熊井 本光
- ▲宗教の權威 山名 日宗
- ▲今身より佛身へ 山名 日宗
- ▲二十三日午後二時下谷初音町本授寺に於て 笠原圃田師の講話あり
- ▲二十五日午後一時淺草吉野町圓常寺にて 笠原圃田師の講話あり
- ▲同日午後七時淺草吉野町圓常寺にて 笠原圃田師の講話あり
- ▲二十五日午後一時統一閣日曜講演 石井 曉應
- ▲文明の宗教 井時 日成

五月一日午後六時小石川白山會講演

- ▲法華經の實行也 三上 義徳
- ▲朝鮮視察談 朝倉 俊達
- ▲二日午後一時統一閣講演 精神の交通 三上 義徳
- ▲信受すべし 朝倉 俊達
- ▲肉と靈 原田 日男
- ▲信は力也 本多 日生
- ▲五日午後六時淺草永住町四恩教林講演會 開き野口日主師等の法話あり
- ▲八日午後一時根岸光明會講演 戰爭と日本國民の信仰 柳生 正生
- ▲八日午後七時小石川本念寺に於て關田師の有益なる法話あり 關田 日城
- ▲九日午後一時統一閣講演 正信とは何ぞや 金光 孝碩
- ▲佛を崇拜せよ 梶木 日種
- ▲行學二道 廣部 永眞
- ▲宗教信仰の妙致 本多 日生

静岡縣

- ▲四月三日午後一時見付町支妙寺に 大講演開催
- ▲開會の辭 吉田 聖晴
- ▲日蓮上人の御消息文に就て 國友 日城
- ▲日蓮主義より觀たる國民道徳 本多 日生
- ▲同日午後八時見付町青年會主催にて磐田座 本多 日生
- ▲に開會多大の盛況を極む
- ▲宗教の信仰と國民道徳 本多 日生
- ▲十一日太田妙安寺開山忌執行演説開會 日什大正師の御傳 古定 堅正

愛知縣

- ▲四月二日午後一時豐橋市妙圓寺に 講演開催
- ▲是好其業 本多 日生
- ▲五日田原町字柳町福元庄作方講演 田久保日城
- ▲日蓮主義と包容主義 田久保日城
- ▲七日田原町字新町廣中廣方講演 田久保日城
- ▲奮闘主義 田久保日城
- ▲十七日田原町字新町渡邊寅次郎方講演 田久保日城
- ▲無量珍寶不求自得 田久保日城
- ▲二十日田原町字新町に於て妙滿會講演 田久保日城
- ▲開會の辭 田久保日城
- ▲日蓮主義の信仰 藤本 智安
- ▲極致の心 野中 通玄
- ▲眞理と信仰 高橋 道順
- ▲二十日午後七時同寺に講演 唯我獨尊 田久保日城
- ▲極致の心 野中 通玄
- ▲本佛の救済力 西山 日輪
- ▲二十五日田原町字新町に於て 田久保日城
- ▲日蓮主義と其抱負 田久保日城

京都

- ▲四月一日午後一時妙滿寺に開會
- ▲疑念は佛道の障り 萩原 啓門
- ▲十日午後七時府下加茂村在郷軍人會堂に青年會員の主催にて精神修養の講話開催 萩原 啓門
- ▲人生活動の基礎 本多 日生
- ▲國民道徳と宗教の信仰 本多 日生
- ▲十一日妙滿寺大法會奉修午前十時財團開會 法要を修し午後一時音樂法要を以て昭憲皇太后尊徳御一周年祭を修す午後三時島田顯忍中村日鏡兩師の説教あり午後七時演説

會開論

開會の辭 萩原 啓門
 同情論 紀野 俊雄
 蓮華の教訓 原田 日勇
 佛受法 堀木 日種
 所作佛事 本多 日生
 ▲十二日午前午後兩度の音楽法要あり後大橋
 日親本多大僧正の説教あり午後七時講演開
 會
 國民性と日蓮主義 有田 安道
 同情と活動 朝倉 俊達
 本尊と信仰 石川 顯隆
 信は功德の母 本多 日生
 委聽者雨中に拘はらず堂に滿ちたり教育と宗
 教の小冊子を論本となしたり
 ▲十三日午前十時祠堂法要を修し午後七時講演開
 會音楽大法要を行ひ萩原啓門師の説教あり
 午後七時演説會を開く
 情存妙法故 田邊 慎一
 最第一 蓮田 純榮
 慶莫道空門の大行 内藤 日郎
 閉會の辭 萩原 啓門
 講演終了後懇勞會を開く席上統合に關する演
 説等ありて大に盛會を極む武中大法會中は道
 野喜八郎吉川平兵衛秋山高兵衛氏等専ら盡力
 せらる

▲十四日樹枝の席に於て天晴會の例會講演
 菩薩の事業 本多 日生
 ▲同日午前十時教學財團第九回通常評議員會
 を妙滿寺に開く市橋理事長病氣の爲め缺席
 せるを以て中村理事之れに代り抽籤に依り

大坂

四月十二日午後七時東區淡路町四
 丁目美術俱樂部に天晴會講演開會
 開會の辭 池田爲三郎
 信と力 小林 一郎
 天晴地晴 山田 三真
 閉會の辭 中平清治郎
 ▲十五日午後二時より東區西高津中寺町蓮城
 寺に於て泉太后第一祭慶修大導師本多大
 僧正堀木住職始め島田顯忍蓮田純榮朝倉俊
 達京藤藤原田邊慎一等諸師長追悼文捧讀
 あり總代及び婦人會幹事焼香あり嚴肅の程
 に式を閉ぢる
 ▲同日午後七時同寺に於て講演開會
 開會の辭 池田爲三郎
 朝鮮視察談 朝倉 俊達
 佛教の根本義 本多 日生
 ▲二十一日午後二時生玉前町堂開寺に婦人會
 開會

岡山縣

四月十五日和氣町本成寺婦人會を
 開會し昭憲皇太后法要を誦修す
 御盛徳に就て 原田 日勇
 ▲十六日本成寺男子會を開き昭憲尊儀法會を
 奉修す 原田 日勇
 ▲廿五日赤磐郡吉原金谷猪三治宅に開講
 花果俱成 原田 日勇
 ▲廿七日和氣在小瀬木佐々木橋夫宅に開講
 人生の基礎 原田 日勇

關西より

四月中本多大僧正の關西巡教の
 日程を報ぜん十八日兵庫縣加古
 郡公會堂に中川文學士講演後國民道徳の講話
 あり同日高砂三義製紙工場に講話を爲し十九
 日同町晴明會に日蓮主義の偉大なるを説き二
 十日姫路地明會に正信と迷信を明かにし天晴
 會にて佛教の根本義を説き二十一日龍野町武
 徳殿にて國民道徳を論じ二十二日岡山本行寺
 に善景品と開目抄の意義を詳説し二十三日顯
 本婦人會にて純正の信仰を勧め天演立正會の
 爲に社會教育の根本を明かにして信仰を鼓吹
 せられたり尙ほ京都大阪に於ける運動亦猛烈
 にして到る所法益の長大なるを認む
 千葉縣 四月一日午後七時山武郡丹尾東成
 寺講演

檀那論

▲八日長生郡大加場道臨寺に於て午後六時釋
 尊御一代日蓮上人傳幻燈會開演經題唱題の
 後山田誠心今井俊貞内藤日郎等之を說明
 す
 ▲九日茂原町道路布教開會大川日教山田誠心
 師獅子吼せらる
 ▲十一日長生郡押日來光寺講演
 陛下の御偉徳に就て 山田 誠心
 ▲同日同郡上野妙興寺山本賢樂師の講演あり
 ▲十三日午後六時長生郡長柄村一橋に於て日
 方僧正一周忌の供養講演を開演す
 閉會の辭 大川 日教
 佛教の大要 山田 誠心
 善惡の分解 長岡 育應
 信仰の行相 今井 俊貞
 供養の意義 秋山 乾英
 人生の快樂 渡邊 乾航
 日蓮主義と國民の自覺 成島 泰行
 宗教の本領と其の功果 笹川 日堂
 ▲十四日午後一時市原郡内田村本傳寺に精辨
 講話を開く 國分 顯有
 日蓮主義の眞價 渡邊 乾航
 心の營養 朝倉 俊達
 宗教の心髓と宗教の情操 笹川 日堂
 ▲十五日長生郡珠光寺に於て山本賢樂師
 の講演あり
 ▲十七日同郡長柄村里木區長宅にて渡邊乾航
 師の講演あり
 ▲同日午後山武郡南横川芳墳寺に開講
 種子無上論 小竹 俊雄

日什上人傳

成島 泰行
 ▲十八日長生郡豐田村北塚白井七太郎方に於
 て幻燈會開演山田誠心吉井光之を説明す
 ▲十九日市原郡金剛地本宮寺の奏師報恩會を
 開ふ
 閉會の辭 西村 會立
 誠實の辭 吉見 俊教
 信仰要義 富田 林惠
 ▲廿日山武郡丹尾東成寺にて講演會を開く
 閉會の辭 渡邊 玄雅
 人格の完成 高貫 見龍
 日蓮教徒の使命 成島 泰行
 ▲同日長生郡山根滿藏寺にて大川日教渡邊乾
 航師の講話あり
 ▲同日市原郡金剛地有志の請に依り講演開會
 須く大道を信ぜよ 吉見 俊教
 自己を尊重せよ 富田 林惠
 ▲廿二日午後山武郡南横川三光寺開講
 油斷大敵の意義 小竹 俊雄
 日什上人傳 成島 泰行
 ▲廿三日山武郡瑞穂村小中瑞北青年會講演
 大正青年の覺悟 朝倉 俊達
 ▲廿四日會茂原道路布教開會山田誠心竹内顯領
 師の傳道あり
 ▲同日長生郡新治村大澤寺に講演開會
 精神と物質の營養 吉見 俊教
 信仰と現實 朝倉 俊達
 ▲同日同郡青年會にて講演を開く
 青年の元氣 高石増次郎
 佛法の態度及び心得 金坂 豐藏
 活佛教 富田 林惠

慶讃文

修養の眞意義 朝倉 俊達
 答辭 高石 一郎
 ▲廿五日同郡千代丸大正寺にて渡邊乾航大川
 日教師の講演あり
 ▲廿六日午後同郡大澤寺に開講
 信仰の要義 朝倉 俊達
 ▲廿六日より三十日に至る五日間の大法會は
 縣下に名高き布田藥王寺に於て音楽雜見の
 儀式を以て勤修せられたり藥王寺に本堂營
 繕起工以來三十餘年漸く落成の効果をみる
 に至りたるを以て開堂式を併せて舉行した
 り先是準備員諸氏の熱心なる遺憾なく萬般
 の設備整ひたり廿六日は朝來潮の如く雲を
 來る雲詣の群集堂の外に溢れ午後一時を
 報ずるや第一第二の號鐘とともに中田大僧
 正は三十有餘名の僧具音楽伶人天童に隨從
 せられ、嚴かに開堂式法要を營まれたり、
 慶讃文開堂式辭祝文等あり慶讃文左のこと
 慶讃文
 謹て勤請し奉る本門常住の三寶護法列位の
 諸天善神來臨瞻嚮悉知昭覺無妙法蓮華經
 伏して惟る久遠の本佛法界の醫王大恩教
 主釋迦牟尼世尊は慈悲益物の意輪常に斷
 ゆることなく能爲救護の佛事暫も廢せず
 應用を十方に垂れ利益を三世に施す本法五
 濁の世界を愍念すること偏に重く水化の上
 首日蓮大士を東海の靈園に遣し妙法五字の
 大真藥を授け佛意海に深遠化益眞に洪大謹
 か能く之を窮めん孰か能く之を説せん抑我
 不老山藥王寺は創草已來二百餘年の星霜を

開みし堂宇頹廢を極めしが日蓮佛燈以來専ら本堂軍裡の修營に力を注ぎ中項更に其規模を擴大して本堂全部改修し梁柱瓦石の大部を新にして屋上の茅葺を改めて銅葺となし堂の内外には諸種の美術彫刻を施し内陣全部の荘嚴を新にして天蓋帷帳其他一切の佛具或は修理し或は新調し悉く金碧燦爛の光輝を放つ美庭極麗石等境内一面の風光亦其美を増し殆んど舊觀を一變するに至る思ふに今日の盛況を睹る所以のものは檀信徒の外護并に我衣鉢の資を割きて之に投じたるに依ると雖佛陀大慈の冥歎あるに非んば何ぞ此に至らんや茲に本月廿六日より三十日に至る五日間を卜し千葉縣聯合大法會を兼ね當山本堂落成入佛式を舉行す此間修する所の白善は開堂供養本修奉修下檀信徒祖先追福明治天皇昭憲皇太后孝悌帝國陸海軍戰病疫の忠靈并に歐州戰爭死亡者追弔日蓮聖人開宗記念報恩等の勝妙事なり一會の大衆は本宗管長親下を首め縣下同宗諸僧員にして五種の妙行慈愍鄭重を極め演說施本等に盡夜不眠の法輪を轉じ花の如き天童稚兒咽嘆たる音楽梵吹與に讚佛乘の妙縁を結ばしわ嗚呼大會所修の善根窮り無く酒はす所の利益際りあること無けん仰ぎ願はくば此功徳を以て正義の宗風四海を靡かし妙法の化益一天に雲ひ鼻道長へに隆昌し萬民悉く悦樂し法界群靈頓に功果を成し四方雲集の男女咸く現當二世所願を成就せんことを南無妙法蓮華經

大正五年四月二十六日

辰島泰行藤川寛行兩師の説教あり夜は演説を開く

慈悲の叫び
道徳と信仰
未定
統一宗教
心迷悟悟
經卷相承の美風
凡夫即佛
士土
實在の觀念
戦後の宗教
心を師とすべし
是好真樂
二十九日前日來の驟雨にて聊か參拜者の如何を氣遣たるもさすがに信力堅固の善男善女は定刺前堂内に溢れたり午後一時井口善叔師の導師にて三十餘名の僧員及音楽伶人天童之に相和し法要を営まる夫より小橋親正藤田日城兩師の説教あり夜開演説會を開く

二世妙道
自強不息
日蓮上人の情懐と意志
生活の中心
内蘆外蘆
三十日蓮願の日にて前田日應師導師にて總供養の法要を行ふ新くて五日間の大法會は歡喜法悦の内を終りを告げたり是れ偏に佛天の加護と教師僧侶の異體同心を以て至誠盡瘁せられし結果に外ならずと信す

朝鮮布教の記

朝鮮統一の理想を懐ける日蓮主義者が内地に於ける猛烈なる傳播を爲すべきは勿論更に新領地に住居せる人心開拓の運動に従事せざる可らず是れ實に現代の急務なりと信す予之を思ふや久し單獨旅装を整へて朝鮮に渡り其信仰秋盛を大觀し講演を開く概況左の如し

▲二月廿二日慶尚道大邱府光國寺に講演開演 至誠し心意識 朝倉 俊達
▲二十四日同府八雲町に開演 人格完成と信念 朝倉 俊達
▲廿七日全羅道湖南水浦竹洞日宗布教所 開會の辭 高田 眞談
▲現代思想の傾向 朝倉 俊達
▲日蓮主義と人格修養 朝倉 俊達
▲廿八日同布教所に於て 信仰論一本書論 朝倉 俊達
▲三月一日同道榮山浦教會所 開會の辭 佐藤 玄醇
▲實行的信仰一 日蓮主義の三大要綱 朝倉 俊達
▲三月五日京畿道仁川港妙覺寺に於て 開會の辭 墨田 慧海
▲日蓮主義の綱要 朝倉 俊達
▲三月八日平安道平壤府南門通照國寺 開會の趣意 早瀬 孝康
▲日蓮主義の真髓 朝倉 俊達
▲九日同寺開會 統一論 朝倉 俊達
▲十一日黃海道京畿線沙里院布教所 開會之辭 石渡 日敬

不老山福法 大僧正中田日蓮

夜間法益の廣長舌は人心教化の實を擧げたり

開會の辭 海老澤乾樹
信仰の定義 吉見 俊教
信者の行道 鈴木 正二
佛陀の慈悲 長岡 有雄
修養小話 古川 醇蔵
自 信 富田 林惠
▲廿七日千葉縣下寺院代表及有志僧員一般參拜者地方信徒の團集參拜者或は紅白の玄題演説は祝開堂等の祝意を表示せる旗數十流押立參拜するもの群集し盛況を極む午後一時の鐘鐘と共に關田僧正の大導師にて三十餘名の僧員音楽伶人天童に擁せられて法要を勤む式後演説を開く

信佛の價值 小林 智道
成佛問題と法華經 山口 堅
吾人之信仰 山下 純秀
唯道の大精神 朝倉 純一
日蓮主義の信仰 關田 日域

廿八日は中日なるを以て兼て招待状を發し置きたる縣知事縣長警察署長町村長學校職員及其他の名士逐次集来て管長本多大僧正を迎へ午後一時四十餘名の僧員及音楽伶人天童等を從ひ嚴肅なる法要を営まる眞誠文左の如し

謹啓鳳蘭文一章
謹勸諸本門常住三寶護法列位の諸天善神來覽影響悉知照覽あらせ給へ
茲に一會大衆と共に音楽稚兒大法會を嚴修

其旨趣は 明治天皇昭憲皇太后臨御尊嚴皇恩報謝道善御意向の爲なり併せて祈る所は正法興立皇道繁榮國運昌隆萬民快樂眞俗如意各願滿足各所志先願代々の精靈頓證菩提に擬するものなり

夫れ佛陀の明教は四恩報答を以て主要となす一に曰く父母の恩二に曰く衆生の恩三に曰く國王の恩四つ曰く三寶の恩なり斯の如きの四恩は一切衆生平等に負荷す然れば知恩報恩の行爲は我等佛子も一日も苟にすべからざる所なり

日蓮大聖人の曰く須らく國家を祈つて佛法を立つべし空飛ぶ鳥の子を養ひ地を走る獸の子に負めらるを見ても魂も消えんばかりなりと鳥と蟲とは泣けども涙落ちず日蓮は泣かれども涙ひまなし釋尊の三世の御化道思ひやるに道理申すばかりなりなして斯くて日蓮大聖人は我等に四恩報答の安業を示し玉へり

今兩尊儀の皇恩と又各自祖先の遺澤とを道懐し更に佛經三寶の大恩を報謝し衆生相扶の恩に想到すれば此大法會の善根功徳を御意向するは勿論進んで各自の行學を勵み以て報謝の萬一を盡さるべからず今日の法會は斯くて其大なる意義を有すべきなり仰ぎ願くば三寶諸天慈應道交して一會大衆の各願満足なましめ玉へ乃至周遍法界利益仍て圓滿一章如件

維時大正四年四月二十八日
顯本法華宗管長大僧正中田多日生 敬白

日蓮聖人の信仰 朝倉 俊達
▲十二日京城旭町護國寺 開會之辭 加藤 清亮
▲日蓮主義綱要(其一) 朝倉 俊達
▲十三日同所護國寺 日蓮主義綱要(其二) 朝倉 俊達
▲十六日より十八日迄京城護國寺中村正一方 佛敎大意一本書論一信仰安心 朝倉 俊達

▲十七日京城護國寺に於て 國民道徳と敎育觀念 朝倉 俊達
▲二十日北朝鮮第三師團守備隊戦死者追弔法會陸軍共同墓地に於て修行法談 朝倉 俊達
▲二十三日西朝鮮津山本營敵方に講演 朝倉 俊達
▲日蓮主義の一斑 元山港頂妙寺 朝倉 俊達
▲二十四日 元山港頂妙寺 朝倉 俊達
▲二十七日 元山港頂妙寺 朝倉 俊達
▲二十八日 黃海道海州府海州公署 朝倉 俊達
▲二十九日 同所 朝倉 俊達
▲三十日 同所 朝倉 俊達
▲三十一日 同所 朝倉 俊達
▲四月五日 馬山浦妙國寺 朝倉 俊達
▲四月七日 同所 朝倉 俊達
▲四月八日 釜山西町妙覺寺 朝倉 俊達
▲四月九日 同所 朝倉 俊達
▲四月十日 同所 朝倉 俊達
▲四月十一日 同所 朝倉 俊達
▲四月十二日 同所 朝倉 俊達
▲四月十三日 同所 朝倉 俊達
▲四月十四日 同所 朝倉 俊達
▲四月十五日 同所 朝倉 俊達
▲四月十六日 同所 朝倉 俊達
▲四月十七日 同所 朝倉 俊達
▲四月十八日 同所 朝倉 俊達
▲四月十九日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十一日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十二日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十三日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十四日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十五日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十六日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十七日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十八日 同所 朝倉 俊達
▲四月二十九年 同所 朝倉 俊達
▲四月三十日 同所 朝倉 俊達



脳胃の能醫

NOI is No. 1

腦と胃は極めて重要な關係を有す然るに腦神經を鎮靜する藥物は概ね胃腸の機能を害し姑息的たるを免れず本劑は腦神經藥なると同時に消化器を健全ならしむる作用を有す故に理想的の好結果を得べき事を確信す

主治
効能

- 神經衰弱 ●ヒステリー ●不眠症 ●腦痛 ●頭痛 ●惡夢 ●胃加答兒 ●胃弱 ●消化不良

●藥價三日分金參拾錢 ●五日分金五拾錢
本誌讀者に限り約三十%の割引特權あり
希望者はハガキにて申込を乞ふ

▼ノイ平藥▲

東京市下谷區上根岸町百十一番

金澤山石堂

電話下谷二二五九番

謹告

我橘香會は創立當初より豫期と現時の要求と將來の發展の爲會長推戴の必要を認む依て今般本會に深厚の關係ある本多日生師を名譽會長に山田一英師を會長に推戴せり、依て此段本會關係者一同に謹告す

東洋大學橘香會

- 幹事 水野 乾心
- 同 横山 耐琳
- 同 山下 義靜

橘香會關係者各位

轉住 兵庫縣明石町大藏谷圓乘寺

川崎 英照

日宗法衣専門

青雲帽 教服 袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条



飯田法衣店

振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さざる自然の特徴を有し候
小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御満足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價

▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ケ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず

廣告料

表紙うち。うち表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事

雜誌及廣告料金拂込

東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四〇番へ拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込及編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候
▲讀者の特權——本誌讀者にして日達主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし(但し採否は編者の權内とす)

大正四年五月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上 義徹
印刷人 鈴木 日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地
編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地
統 一 團

統合事業に關する
歡喜と希望

法學博士 山田三良

教學上の研究 三大祕法抄綱要

統

日蓮門下發展史記

三上義徹

轉凡見入正智

辯護士 柴崎守雄

宗教撰擇と人格の修養

宗教局長 柴田駒三郎

日蓮門下 祝辭

成立 發表會

▲思想の界の教書▲

◎法華經講義
本多日生師著

洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵稅十六錢を以て提供す

◎如來壽量品講演輯
本多日生師講義

壽量品の大意を知らざれば一代佛の中心を知らざるもの也佛敎の活力眞價は壽量品にあり讀み大に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

◎精神の修養——思想の調整
軍事教育會發行

内容豊富立論堂々近代の快文字なり

定價金卅五錢 郵稅金四錢 上下二卷 郵稅共四十八錢

◎軍神加藤清正公
陸軍少將 小原正恒著

清正公の人格及宗教的信仰を知らんとするものは先づ本書を讀まざる可らず施本用に尤も適せり

定價金十部郵稅共計五十五錢に割引す

◎立正安國論略解
マスター、オヴ、アツア柴田一能著

第一版已に賣切れ再版出來△日蓮主義と國家との甚深なる交渉を知らんするものは須らく本書を讀むべし珍美本にして百十頁の内容あり

定價金十部郵稅共計五十二錢

◎縮法華經並開結

菊判半截携帶に尤も便なり

紙製二十錢 布製天金四十五錢 郵稅四錢

◎橘香集

日蓮上人の遺文拔萃にして研究順序の指南あり

定價金一部拾錢 郵稅貳錢

◎勤行作法

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして通りなきを要す本書は日蓮門下を示したる教典也

定價金一部五錢 郵稅金二錢

東京市神田區榮土代町二丁目一號 三會發行

販賣所 東京市小石川白山前町七番地 三上義徹
【番〇四八八二東京替振】